

ろんだん 佐賀



朝長 修さん
ともながクリニック院長

ともなが・おさむ 1960年生まれ。嬉野市(旧嬉野町)出身。鹿島高一長崎大医学部卒。1987年に東京女子医科大学糖尿病センターに入局、専門医として特に糖尿病性腎症、腎不全の治療に従事する。2006年、ともながクリニック糖尿病生活習慣病センター(新宿区)を開設。東京女子医科大学糖尿病センター非常勤講師。東京都。

男女平等に関する議論はいろいろな場所で行われているかと思います。我が国では女性の管理職、代議士が少ないなどの指摘が目立ち、国別男女平度ランキングでは156カ国中、韓国や中国より下位の120位に沈んでいるそうです。読者の皆さんお分かりと思いますが、1960年生まれ、佐賀県育ちの私は旧態依然とした文化の中にはいました。私の両親はさほどではなかったですが、親戚の叔父様たちには強烈な男尊女卑の思い出が多くあります。座敷で飲み食いしているのは男性客ばかりで、女性陣は酒やつまみの切れ目がないように台所で作業でした。子どもであろうが男児が冷蔵庫を開けると、恥ずかしいからやめろと怒られました。鹿島高校では、修学旅行は女子だけ、男子は残りました。長崎大学医学部は1学年120名、女子は10名以下でした。私の親族には医者

真の男女平等とは

ば見納めに行くとき」と。あせんとしました。すでにそんな世の中ではなかったため、下の学年から男子も修学旅行に行つたそうで、補習をサボって殴られたのも余分な思い出ですが、この話は東京で大受けします。

そんな私の就職先は東京女子医科大学病院です。女子医大ですから学生は全員女性です。男の医者は外の大学からの入局ですが、圧倒的に少数です。特に糖尿病センターは女医さんが多く、看護師、栄養士、事務方も女性ばかりで、環境が一転しました。私は何事も謙虚にやつたつもりだった

つて補習です。当時、佐賀の県立高は同じく同じルールでした。どうして男は旅行に参加できないのかと教師に尋ねたところ、「わいちは進学、就職とか都會に行くチャンスはあるやろ。女子は高校出てすぐ農家や漁師、お嫁に行つたりすつぎ一生、家から出られんかもしれません。最後に都会

拒否でした。医学部のほぼ半数が女子となつた現在では信じられないことで

役割分担、性差を意識せずに

男性が埋め合わせをします。10年経過し、埋め合わせくらいでは腹も立たなくなりました。そして驚いたことに自分が女性に囲まれていないと安心できない体質になってしまったので

られた私が思うのは、医療者は男女関係なく適任がいるということです。ただ体力面では男女差はあります。全く平等、ハンディキープなしというのは無理に実現しなくていいと思います。やっぱり役割分担、性差を意識しないことが大事な気がします。だって、男には逆立ちしたって子どもは産めないですからね。

が多いますが、当時、女医さんは皆無。女の子が医学部志望なんて言つたら親戚中から反対されていました。私が卒業時、長崎大学の手術室には女子トイレもなく、女子更衣室も存在せず、外科系は、はなから女子入局拒否でした。医学部のほぼ半数が女子となつた現在では信じられないことで

女性に医者は務まらないなんて考えていましたが、どうこい、そんなことはありません。頼もしい女医さんがたくさんいました。ただ宿命なのは妊娠、出産で休まれたときは、われわれ前が出ろ」と。さすが叔父さん! 忘れかかっていた「オイは男ばい」という感覚がよみがえりました。極端な男社会から女性中心の職場に入り、順応させに一言二言あいさつして叔父がおきます。開口一番、「何でお前が先に出るとか?」電話は奥さんに取らせて、ちゃんとした用だつたらお前が出ろ」と。さすが叔父さん! 忘れかかっていた「オイは男ばい」という感覚がよみがえりました。電話は奥さんに取らせて、お前が先に出るとか? お前が先に出るとか? お前が先に出るとか?

